

高次脳機能障害支援における地域支援ネットワーク会議(研修)における実証的検討

研究分担者 白山 靖彦 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 教授

【目的】高次脳機能障害支援に重要とされる地域支援ネットワーク会議(研修)「以下会議(研修)」に関し、実証化の検討を行った。【対象と方法】対象は、2013年度内に愛媛県(以下「A」と和歌山県(以下「B」)において開催された会議(研修)に参加した医療、福祉などの関係者(A=159名、B=87名)とした。方法は、ABの会議(研修)で異なるプログラムを実施し、終了時にアンケートを配布回収した。プログラムはA=「事例検討」、B=「高次脳機能障害に関する講習+事例検討」である。アンケートの内容は、個人属性および会議(研修)の役立度、人脈増の期待度、仮想参加費、高次脳機能障害に関する習熟度であり、順位尺度は得点化して統計解析を行った。【結果】回収率はAが92.5%(147名)、Bが97.7%(85名)であった。性別は、ABとも女性の方が多く、所属に関する差はなかった。参加者の資格は、「看護師・保健師」、「社会福祉士」が多かった。会議(研修)での交流数はAが5.54(±5.90)人、Bが2.55(±2.67)人であった。会議(研修)の役立度、人脈増の期待度に関して差はなく、双方の得点とも高かった。仮想参加費はBの方が上回った。参加経験の有無に関する差異では、Aのみが「診断基準」「リハビリ方法・支援対応」「連携先の社会資源」「支援拠点機関の認知」に差が認められた。【考察】参加者は会議(研修)の有用性を意識していること、初参加者に対してはBタイプのプログラムの方が効果的であることが分かった。

ン病院の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## A．研究目的

高次脳機能障害支援に重要とされる地域支援ネットワーク会議(研修)「以下会議(研修)」に関し、その有用性などについて実証的検討を行った。

## B．研究方法

対象は、2013年度内に愛媛県(以下「A」と和歌山県(以下「B」)において開催された会議(研修)に参加した医療、福祉などの関係者(A=159名、B=87名)とした。方法は、ABの会議(研修)で異なるプログラムを実施し、終了時にアンケートを配布回収した。プログラムはA=「事例検討」、B=「高次脳機能障害に関する講習+事例検討」である。アンケートの内容は、個人属性および会議(研修)の役立度、人脈増の期待度、仮想参加費、高次脳機能障害に関する習熟度であり、順位尺度は得点化して統計解析を行った。なお、本研究はA、Bの許可、松山リハビリテーシ

## C．研究結果

回収率はAが92.5%(147名)、Bが97.7%(85名)であった。参加者の平均年齢はAが39.90(±9.12)歳、Bが41.52(±11.56)歳であった。経験年数の平均はAが7.56(±6.56)年、Bが6.73(±7.19)年であった。会議(研修)への参加有無に関してAは「なし」35人「あり」112人、Bは「なし」41人「あり」43人であった。参加有無で「あり」と回答した参加回数は、Aが5.61(±6.48)回、Bが2.05±2.20回であった。性別は、ABとも女性の方が多く、所属に関する差はなかった。参加者の資格は、「看護師・保健師」、「社会福祉士」が多かった。会議(研修)での交流数はAが5.54(±5.90)人、Bが2.55(±2.67)人であった。会議(研修)の役立度、人脈増の期待度に関して差はなく、双方の得点とも高かった。仮想参加費はBの方が上回った。参加経験の有無に関する差

異では、Aのみが「診断基準」「リハビリ方法・支援対応」「連携先の社会資源」「支援拠点機関の認知」に差が認められた。

## プログラム

A(6カ所で実施)	B(3カ所で実施)
—————	<b>学識講師による研修(90分)</b> ・高次脳機能障害の病態 ・診断基準 ・リハビリ・支援対応方法 ・職業リハ・就労支援 ・地域支援・社会資源 ・支援拠点機関の紹介
<b>事例検討 90分から120分</b> 1~2事例 地域の相談支援事業所などが提供 ・事例概要の説明 ・課題と今後の方向性について討論 ・(仮)プランなど発表 ・コメンテーターによる講評	

## D . 考察

参加者は会議(研修)の有用性を意識していること、初参加者に対してはBタイプのプログラムの方が効果的であることが分かった。

## E . 結論

本研究の対象は、会議(研修)の参加者としたため、直接的に高次脳機能障害者に役立つものではないが、プログラム内容の工夫により、間接的効果を得るものであることが分かった。

## F . 健康危険情報

特になし

## G . 研究発表

### 1. 論文発表

1)Sonoda Shigeru, Yasuhiko Shirayama, Tanabe Sachiko, Shimomura Kouji and Suzuki Shin :  
Validity of the progress notebook in supporting patients with higher cortical dysfunction, Japanese Journal of Comprehensive Rehabilitation Science, Vol.5, pp.93--96, 2014.

2)Sonoda Shigeru, Yasuhiko Shirayama, Sakamoto

Rie, Nagai Shota and Sakurai Shinobu : Factors Influencing the Zarit Burden Interview in a Japanese Community:Activities of Daily Living and Depressive State, International Journal of Physical Medicine & Rehabilitation, Vol.2, No.216, 2014.

3)白山 靖彦 : 高次脳機能障害者に関連する法制度、クリニカルリハビリテーション, Vol.23, No.11, 1059~1065 頁, 2014 年

4)白山 靖彦 : 社会福祉の立場から認知症高齢者の意思決定プロセスを考える, 日本補綴歯科学会誌, Vol.6, No.3, 255~260 頁, 2014 年.

### 2. 学会発表

1. 濱本 恵, 白山 靖彦, 中野渡 友香, 中原 佳子, 佐藤 紀, 江西 哲也, 加藤 真介, 木戸 保秀 : 重なり五角形を用いた高次脳機能障害評価法(スクリーニング)の検討,

第 38 回日本高次脳機能障害学会, 2014 年 11 月.

2. 白山 靖彦, 伊賀上 舞, 木戸 保秀 : 高次脳機能障害支援拠点機関の前方連携に関する調査報告, 第 38 回日本高次脳機能障害学会, 2014 年 11 月.

3. 白山 靖彦 : 高次脳機能障害支援に関する地域支援ネットワーク会議(研修)に関する報告, 第 38 回日本高次脳機能障害学会, 2014 年 11 月.

4. 中野渡 友香, 白山 靖彦, 中原 佳子, 濱本 恵, 佐藤 紀, 江西 哲也, 加藤 真介, 木戸 保秀 : 高次脳機能障害者における簡便な自動車運転評価法の検討, 第 38 回日本高次脳機能障害学会, 2014 年 11 月.